

〔新刊紹介〕

瀧本和成・深町博史編

『森志げ全作品集』

吉野 莉奈

森志げ（一八八〇～一九三六）は森鷗外
の二人目の妻である。彼女が一九一〇年
代、精力的に小説を発表していたことは、
いまや忘れられたことであろうか。人々の
生の証が忘却の彼方へ旅立たんとするの
を、いま少し、と留めおくのも研究者の使
命であろう。本書『森志げ全作品集』は、
志げの小説家としての側面を照らし出す。

一九〇九（明治四二）年から一九一二（大
正元）年の三年間に彼女が発表した全二四
作品を収録し、現代に甦らせた。全て短篇
である。初出を底本とし、本文校訂を行
い、各作品に註・解題を付している。資料
篇として、異同表・年譜・森家の系図・参
考文献一覧がある。

編者である瀧本和成は、志げの作品を鑑
賞・研究する意義として以下のことを挙げ
ている。曰く、「作者の心の在り様と生き

方」や「鷗外との結婚生活と森家を巡る人
間模様」、「当時の女性が置かれていた立場
や状況」、そして「日本近代文学、特に一
九一〇年代の文学作品における家族や家庭
の在り様」を考える契機となること、日本
の近代女性史を識る上で貴重な資料となり
得ること、作者森志げの美意識を作中の言
葉や表現から抽出し、解明できることであ
る。また、もう一人の編者である深町博史
は、「波瀾」の解題において、「全体として
劇的な展開が少なく日常の一場面を切り取
ったような作風」「時代を先駆け、それを
切り開いていく者たちが持つ〈批判〉の目
は乏しい」が、「当時の人々、殊に女性達
の精神生活を異なる面から照射する」と、
志げの小説を評している。

寧な作品論となっている点にある。これら
は志げの小説研究の先達となるであろう。
執筆の一覧には、すでに本学を修了され
ている方々の懐かしいお名前が並んでい
る。本書は、本学で開催されていた「森志
げ作品研究会」の成果でもあるらしい。ま
た、編集を担当された嵯峨野書院の鈴木ち
よ氏は、二〇二二年度に本学博士後期課程
へ進学し、志げの小説の研究を開始され
た。本書の出版をきっかけに、小説家・森
志げ研究のさらなる発展に期待したい。

志げの作品には、裕福な家庭に生まれ育
った奥さまらしい、あつさりとした優雅さ
がある。薄ピンク色でアール・ヌーヴォー
調の愛らしい装幀も微笑まれる（鈴木氏か
ら、志げの好んだ退紅色を用いたと聞いて
いる）。心を和らげた時、作中に登場す
る紅茶やココアを飲みながら、ぜひ手に取
っていただきたい。

（嵯峨野書院 二〇二二年三月 四〇四頁
本体価格三、〇〇〇円）

（よしの・りな 本学大学院博士課程後期
課程）